

《シンポジウム I》

心筋シンチグラフィの現状と臨床へのフィードバック

司会のことば

西 村 恒 彦 (国立循環器病センター放射線診療部)
 米 倉 義 晴 (京都大学医学部核医学科)

タリウム心筋シンチグラフィが導入されて十余年経つ現在、本法は当初予測されていた以上に臨床的に汎用され、心臓病学における検査法として確固たる位置づけがなされている。一方、最近、^{99m}Tc 標識心筋シンチグラフィや、¹¹¹In-anti-myosin, ¹²³I-脂肪酸など新しい放射性医薬品が開発され臨床治験が行われつつあるこの時期にあたり、心筋シンチグラフィが現時点でどのように使われ、日常診療にフィードバックされているのか総括し、かつ、今後どのように展開されるのかその方向を本シンポジウムで探ってみたい。第1の主題は心筋虚血の検出である。村田先生には、タリウム定量診断；washout 法や、SPECT による機能図表示が心筋虚血の検出精度を向上させるのか、成田先生には、運動負荷と dipyridamole 負荷の両者の差異と、どのように使い分けるのか、今井先生には、近年話題になっている無症候性心

筋虚血における本法の役割について、山辺先生には、冠循環微小循環における本法の有用性について肥大心、心筋症をとりあげ発表していただく。第2の主題は心筋 viability の評価である。大和田先生には、負荷時再分布で心筋 viability をどの程度判定できるのか、玉木先生には、PET を用いた¹⁸FDG との対比から再分布の意義について、森下先生には、本法が CABG や PTCA の評価にどのように役立っているのか、植原先生には、負荷を行えない急性期における安静時再分布の意義について発表していただく。そして最後に、司会をさせていただく、西村、米倉から SPECT および PET を用いた新しい心筋シンチグラフィの展望について述べたい。本シンポジウムでは、ディスカッションに多くの時間をさき、現状での問題点を整理し、将来の進むべき方向について会員の先生方とともに考え、実りあるものにしたい。

1. 心筋虚血の検出

(1) タリウム定量診断

村 田 啓 (虎の門病院放射線科)

心筋虚血の評価法として塩化タリウムが臨床の場に登場してから久しい。とくに、planar から SPECT に変わってから、その診断精度が一段と向上し、心筋の虚血、viability の判定に不可欠な

検査法として広く利用されるようになった。タリウムは今や虚血検出のスクリーニング法としてだけではなく、治療法の選択、治療効果の判定、経過観察にとって重要な情報を提供するものとして